

青年の仲間関係に関する研究ノート

栗 本 かおり

Notes on Adolescent's Peer Relationships

Kaori KURIMOTO

The purpose of this paper is to review the influence of adolescents' peer relationships on their psychosocial development. Adolescents influence on each other, though some psychosocial merit and demerit emerge in peer influence on adolescents. The merit improves adolescents' identity, self-esteem, satisfaction of life and happiness, provides support under the crisis as well. A case of the demerit can be seen as the negative peer pressure. Adolescents are willing to conform to the norm of peer group they belong to, and, in fact, they fear that a departure from the peer groups' norm lead to the exclusion from the group. But, the foremost task is to review a lot of the prior studies, for development of the scale for adolescents' peer relationships.

序

このノートは、青年の仲間との関係を測定する尺度作成のための文献レビューに相当する。青年は仲間同士で影響を与え合う。その影響は青年にとっては心理社会的なメリットとデメリットが存在する。仲間が持つ心理社会的メリットとは、同年の青年間の対等な立場での自我の模索が可能であるといった点である。青年は親あるいはそれに類する成人から自由を得ようと試みる。この自由とは、家族内で日常的なことを決定する自由や新しい対人関係を結ぶ自由、教育や政治的信条、将来の仕事について自分自身が責任を取るといった個人的自由である (Coleman and Hendry, 1990)。仲間は個人的自由、ひいては親からの独立を模索する場を提供する。この模索は青年の自我同一性の発達を促し、自尊心、自己肯定、自己受容に小さくはない影響を及ぼす。しかし一方、仲間は集団内の凝集性の高さを維持するため、また仲間の一員であることを証明するために、他の仲間成員から圧力がかかる場合もある。

ピア・プレッシャーと呼ばれるものである。このピア・プレッシャーがネガティブに機能した場合、ピア・プレッシャーは青年の仲間関係がもつ心理社会的デメリットの一つとなるといえよう。例をあげるならば、仲間内で統一した服装をしている、同じようなヘアスタイルである (Coleman et al., 1990) といった小さなことから、喫煙や万引きなどの軽犯罪や特定の青年に対していじめ及び無視、至っては私刑を言語・非言語のうちに強要するなどまで枚挙に暇がない。

この心理社会的メリットとデメリットの二つはまた、「青年の仲間関係尺度」を作成する際の構成概念として扱うことができる。

なお、本論では Fasick (1984) に従い、青年期を12, 3歳から18, 9歳、すなわちおおそ中学入学から高校卒業までの間の発達段階として採用する。後期青年期と明記する場合には、大学生を意味する。また「青年の仲間グループ」という言葉は二つの構造を示している (Scheidlinger, 1984)。彼によると、青年の仲間グループとは、一つはまとまりがなく大きい、潜在的

に結びつきの強い仲間文化（例として、ロック・コンサートや、ある学校に所属する生徒など）のことであり、もう一つは実際に顔を突きつけあう、クラブや運動チームなどの公的な集団、あるいは私的なグループのことである。本論で扱う「仲間」あるいは「仲間集団」というタームは後者の構造を意味する。

Palmonari, Kirchler and Pombeni (1991) も、仲間はだいたい同年齢でかなり親しい友だちで構成されており、同じ活動を共有する者で構成されると定義している。大橋 (1984b) は、仲間とは行動をともにする相手、あるいは対等な横の関係を結びうる相手という意味であると定義している。また仲間集団の構造は、年齢や性別、社会階級、余暇活動、関心などに基づくある種の均質性が認められる (Coleman et al., 1990)。「仲間関係」というタームも同様に、後者の構造を採用した小集団内での関係を指す。また、“友人”や“友だち”、“仲間”というタームの概念を区別せずに使用している研究は多い。本論においては、“友人”、“友だち”はある特定の個々人を指すものとし、“仲間”は上記に示したような小集団を意味することとする。

しかし友人との一対一の関係と比して仲間との関係に言及した研究は乏しいと言える (Stefanco, 1984)。これは友人関係が及ぼす青年に対する心理社会的影響の調査を施行する際、被験者が後期青年期にある大学生である場合が多いことに起因するだろう。松井 (1996) は、青年は学年があがるに連れ「心を打ち明けよう」という行動が急増することを示唆した。また一方で、「一人の友よりグループ全体で仲よくする」といった行動は減少していくことにも言及している。つまり多くの研究で被験者とされている大学生はすでに後期青年期にあり、彼らはすでにギャング・エイジと呼ばれる発達段階を終えている。そのため、一対一の関係を中心とした研究が多く存在すると考えられる。その点を考慮すれば、青年を取り巻く“友人関係”ではなく“仲間関係”を研究目的として挙げるならば、被験者は中学生から高校生が適当であると考えられる。

仲間が青年に及ぼす心理社会的メリット

ここでは、仲間が青年に及ぼす心理社会的メリットについて説明する。まず心理社会的メリットについては仲間がいかに、またどのような側面で青年の心理社会的発達に影響を及ぼすか、またその結果どのような

効用が認められるかについて述べる。

ストレッサーに対する緩衝効果と発達へのサポート

青年期という発達段階は20世紀はじめに明らかにされた (Peterson, 1988)。しかし近年増加しているというものの、青年期に関する研究は幼児期や成人期のそれと比較すると多くはない。しかし、これらの調査研究の中には、青年の発達の側面に注目した研究が多く見受けられる。発達の変化は生理的変化、心理的变化、社会的変化の三つの側面に分けられる (Peterson, 1988)。この三つの側面は本来常にリンクしており、互いに影響を与え合っていると考えられるが、本論では特に心理的な発達の変化と社会的発達の変化に焦点を当てる。このような変化は青年にとってストレッサーとなりうるが、そのストレッサーに対する緩衝効果を持つものの一つに青年を取り巻く仲間関係があげられる。

青年期における仲間の存在は、多くの研究者が述べるように、同一性や自尊心、自立心の発達に大きな役割を負う (e.g., Erikson, 1968; Fasick, 1984; Palmonari et al., 1991; Shulman, 1993; Cairns and Cairns, 1994)。栗本 (1997) は青年の社会的コンピテンス尺度を作成する際、主成分分析や因子分析の結果、対人関係に関する因子は仲間に関する項目が、親以外の成人との関係を訊ねた項目に比して、高値かつ有意な負荷を得ることを見出した。栗本は青年を取り巻く環境においてその大部分を仲間関係が占めているためであろうと考察している。このような現象は Csikszentmihalyi, Larson and Prescott (1977) の実態調査でより明らかにされており、青年は友だちと話をすることにその時間の41%を費やしていると報告されている。また青年にとって友だちと話をすることは最も楽しい活動であるとみなされていることも示唆している。Douvan and Adelsen (1966, cited in Rawlins and Holl, 1988) は、青年期の課題は自主性とアイデンティティとを発達させることにあるとし、それには仲間との友情が大きな役割を果たすことを示唆している。彼らは青年期の仲間関係の特別な点は、家族が提供できない成長や自己覚知ができるような環境を与えることにあるとしている。また La Gaipa (1979, cited in Rawlins et al., 1988) は、仲間は自己の受容と自尊心の肯定的サポートのために重んじられるとしている。

青年期は多くの対人的変化をもたらす発達段階であ

る。Palmonariら(1991)の報告では、イタリア人青年の54%が家族成員との間に何らかの葛藤を抱えていると述べている。青年期は自我同一性獲得の時期であり、青年は親に対する依存と独立心との間で葛藤することになる。親は子どもをコントロールする立場で青年に接するが(Douvan et al., 1966, cited in Rawlins et al., 1988)、青年自身は自立への欲求を抱えるようになるため、それをわずらわしく感じるようになる。この時に家族と青年との間に葛藤が生じると考えられる。一方、仲間集団は「自由」を基盤とし(Douvan et al., 1966, cited in Rawlins et al., 1988)、青年が大人や親からコントロールされずに自律性を模索できる場を提供する(Olbrich, 1985, cited in Palmonari et al., 1991; Weinstein, 1969, cited in Palmonari et al., 1991)。

青年は、仲間をサポート資源と見なし(Cairns et al., 1994; Csikszentmihalyi et al., 1977; Hoffman, Ushpiz, and Levy-Shiff, 1988; Palmonari et al., 1991, Rawlins et al., 1988; Shulman, 1993)、親とは異なった分野での相談相手と捉えている(Palmonari et al., 1991; Rawlins et al., 1988; 松井, 1996)。Palmonariら(1991)によると、青年は将来に関することなどは親に相談するが、現在の発達課題については仲間に打ち明けることが多い。また彼らは、青年自身は自分の仲間を、同一性や関心、能力、パーソナリティを定義する、評判をよくする、個別性と同調性との間でバランスがとられるようにサポートしてくれるものと見なししていると示唆した。青年の孤独感に関するInderbitzen-Pisaruk, Clark and Salano (1992)の研究では、孤独感自尊心が低いこと、社会的不安が高いこと、ソーシャルスキルが乏しいことと有意に関係していることを示唆している。このことについてはPalmonariら(1991)も、仲間との社会活動に参加していない青年はおそらく孤独で不安だろうと推測している。つまり仲間がいないことは、青年の自尊心の低さ、社会不安の高さ、ソーシャルスキルの乏しさに関係しているといえよう。その他にも、Shulman (1993)は青年の適応に対するコーピングに仲間の利用可能性が大きく貢献していることを検証した。Kamptner (1988)の調査結果によると、青年の社会的な自信や交友関係の度合いを高めることでも、間接的に青年の自我同一性の発達が促進される。

青年が危機的状況下にある場合にも、仲間が果たす役割は大きい。Hoover (1984)は仲間文化発達プログ

ラム(Peer Culture Development Program; PCD)を用いて、シカゴの中学二校、高校一校の問題行動を起こす生徒を対象に、この仲間文化発達プログラムを施した生徒(実験群)と施さなかった生徒との比較調査を行った。その結果、実験群では反社会的な行動や中退率が減少し、問題行動を起こさなくなったと報告している。また両親の離婚は青年にとって非常にストレスfulな出来事であり危機となりうるが、Bloom (1990)は両親の離婚は青年の心理社会的発達を抑制することもあれば促進することもあるが、凝集性の高い仲間集団に所属していればその青年が両親の離婚から生じたトラウマから距離を取れるよう手助けするというのを、Berg-Cross and Shiller (1985)の研究から引用している。

一方で、青年期に親あるいはそれに類する成人と青年の仲間が対立するような伝統的な構造や世代間の対立は、少なくとも欧米の調査では見受けられない。上記の説に対する反証は少なくはない(e.g. Brittain, 1969, cited in Palmonari et al., 1991; Larsen, 1972, cited in Palmonari et al., 1991; Coleman, 1980, cited in Palmonari et al., 1991; Coleman et al., 1990)。仲間や家族が持つ機能が青年の心理社会的発達に正の影響を与えることを検証した調査研究は多い。例えばGreenberg, Siegal and Leitch (1983)は、青年が仲間や両親に向けている愛着の質を評価するための青年愛着指標(Inventory of Adolescent Attachments)を作成し、青年の自尊心と仲間や両親との関係についてどれくらい満足しているかを測定する尺度を用いて、階層的回帰分析によって、その関係を検証した。彼らによると、青年の両親や仲間との関係は、自尊心や生活の満足度と関係していた。また仲間の場合は、幸福度をも説明していた。Hoffman, Ushpiz and Levy-Shiff (1988)は、親や仲間からのソーシャルサポートが青年の自尊心に与える影響に関する調査を行った。その結果、両親や仲間からの賞賛や受容は、青年の自尊心に正の影響を与えることを検証した。青年は親からのサポートと仲間からのサポートを目的によって使い分けているといえる。

以上のことから、仲間との関係は親以外の成人との関係に比べ重きを置かれており、仲間との接触に多くの時間を費やしていることから、青年にとって仲間はその生活の中で重要な位置を占めていることが示唆された。適切な仲間関係は青年の自我同一性の発達を

促し、自尊心や生活満足度、幸福度に正の影響を及ぼす。また孤独や両親の離婚などの危機的状況、軽犯罪などの問題行動、適応などと望ましい関係を有していることが明らかになった。

仲間が青年に及ぼす心理社会的デメリット

ここでは、仲間が青年に及ぼす心理社会的デメリットについて、ピア・プレッシャーを中心に説明する。

ピア・プレッシャー

ピア・プレッシャーは、Coleman ら (1990) によると、「仲間によって規定されたある種のガイドラインに沿った考え方や振舞い方に対するプレッシャー (p. 120)」と定義されている。つまり、ピア・プレッシャーそれ自体はポジティブ・ネガティブの両面を持つ概念である。何らかの仲間集団に所属することは、青年にとって安心感とサポートを与えるものであることは上記に示したとおりである。Erikson (1968) によれば、仲間集団に加入することは、本質的に青年の同一性発達にとって健康的なものであると主張している。また Coleman ら (1990) はさまざまな調査をレビューし、青年はピア・プレッシャーに進んで従う傾向があること、また特に、仲間集団の習慣や社会的相互作用に関するプレッシャーを、喜びを以って受容することを発見している。その習慣や社会的相互作用のありようは仲間集団ごとに異なるが、全ての仲間集団が同一性発達を育むことを目的に機能しており、特に自己の自律性や親密な仲間との愛着に至ることを目指している (Coleman et al., 1990)。そのような目的がある限り、仲間集団の規範に従うことが青年にとって大きな喜びとなるであろうことは想像に難くない。

しかし一方、ピア・プレッシャーはネガティブな側面も持ち合わせている。また一般にピア・プレッシャーと表記あるいは口述する場合、それはネガティブな側面がクローズアップされている場合が多い。書籍やインターネット上のホームページ等で“ピア・プレッシャー”と題されるものの内容は、たいていは青年自身に向けて発信されており、その内容はほとんどがいかにして意に染まない行動を勧められた際に断るか、ということに焦点が当てられている (e.g., Scott, 1997; Kaplan, 1999)。ネガティブ・ピア・プレッシャーは青年が所属する仲間集団の規範が社会の規範から逸脱しており、かつ本人がそれを受容しがたいと感じてい

る際に生じると考えられる。また犯罪に至るほどの大きな出来事でなくても、日常生活において意に染まない行動や思考を強要されることは、より頻繁に生じていると推測できる。しかし、青年はこのネガティブ・ピア・プレッシャーを受容する場合が多い。軽犯罪的な行動であろうと、仲間と同じ行動をしなくては侮られたり、仲間はずれにされたりする可能性があるからである。「みんなやっている」、「心配するな、誰にも分からない」(Kaplan, 1999, p.26) などと言われれば、青年は追いつめられる。例えば、Kaplan (1999) はネガティブなピア・プレッシャーについて、多くの被験者に対して縦断的インタビュー調査を行った。その中でコカインを使用している青年の例を挙げている。この16歳の青年は「コカインを使うことは本当によくないことだと分かっている。…でも仲間と一緒にいるときだけは使ってしまう。…もし、自分がそれをしなかったら、もう仲間ではいられないだろう (p.25)」と述べている。また仲間と「万引きクラブ」と称して万引きを繰り返していた15歳の青年も同じような発言をしている。Lloyd and Lucas (1998) は青少年の喫煙に関する先行研究をレビューし、以下のような結論を導き出している。その結論とは、仲間が喫煙していることは親が喫煙しているかや学校でのストレス以上により大きな因子となっていること、煙草を吸い始めるとそれまでに喫煙していた仲間との友情が深まることである。また競争場面、特にスポーツなどでは習慣的に仲間とともに喫煙することで、仲間集団内の凝集性が高まる効果が見られることにも言及している。

ま と め

以上のレビューから、青年の仲間関係は青年の心理社会的発達や自尊心や満足感、幸福感を高め、危機的状況においてもサポート資源となることが分かった。またピア・プレッシャーは同一性発達に対して望ましい側面を持ちながらも、その影響がネガティブなものになった場合、喫煙や薬物濫用などの反社会的行動にまで至ることも明らかになった。青年の仲間関係は彼らにとって重要な社会的行動であり、時には親子関係からの影響をも凌駕する。

しかし、本論のレビューでは青年の仲間関係に関する尺度の作成が可能であるとは言いがたい。構成概念は仲間から受けるよい影響とネガティブなピア・プレッシャーの二つを挙げるとしても、それぞれの下位概念

がまだ曖昧なままになっているからである。

このためにまずは、本研究ノートの眼目である青年の仲間関係に関するレビューを大量に行わなければならない。確固としたレビューとそこから導き出された構成概念や下位概念の二つがそろわなければ、確立した理論に裏打ちされた尺度の作成は不可能である。また、ここでレビューした論文のほとんどが1900年代後半のものであるという点も大きな欠点である。よりアップ・トゥ・デイトに近年の論文あるいは書籍からレビューする必要がある。尺度作成は以上の条件を満たした上で行われなければならない。

引用文献

- Bloom, M., 1990, The psychosocial constructs of social competency, In Gullotta, T. P. Adams, G. R. and Montemayor, R. (Eds.), 1990, Developmental social competency in adolescence. SAGE.
- Cairns, R. B. and Cairns, B. D., 1994. Lifelines and risks: Pathway of youth in our time. Harvester Wheatsheaf.
- Coleman, J. C. and Hendry, L., 1990, The nature of adolescence (2nd). Routledge.
- Csikszentmihalyi, M., Larsen, R., and Prescott, S., 1977. The ecology of adolescent activity and experience, *Journal of Youth and Adolescence*. Vol.6(3), 281-294.
- Erikson, E. H., 1968. Identity: Youth and crisis. faber and faber.
- Fasick, F. A., 1984. Parents, peers, youth culture and autonomy in adolescence, *Adolescence*, Vol.19 (73), 143-157.
- Greenberg, M. T., Siegal, J. M. and Leitch, C. J., 1983. The nature and importance of attachment relationships to parents and peers during adolescence, *Journal of Youth and Adolescence*. Vol.12(5), 373-386.
- Hoffman, M. A., Ushpiz, V. and Levy-Shiff, R., 1988. Social support and self-esteem in adolescence, *Journal of Youth and Adolescence*. Vol.17(4), 307-316.
- Hoover, T., 1984. Peer culture development: A focus on the behavioral problem student, *Small Group Behavior*, Vol.15 (4), 511-524.
- Inderbitzen-Pisaruk, H., Clark, M. L. and Solano, C. H., 1992. Correlates of loneliness in midadolescence, *Journal of Youth and Adolescence*. Vol.21(2), 151-167.
- Kamptner, N. L., 1988. Identity development in late adolescence: Causal modeling of social and familial influence, *Journal of Youth and Adolescence*. Vol.17(6), 493-514.
- Kaplan, L. S., 1999. Coping with peer pressure. Rosen.
- 栗本かおり, 1997. 青年のコンピテンス評価尺度作成, 関西学院大学社会学部紀要 78, 145-153.
- Lloyd, B. and Lucas, K., 1998. Smoking adolescence: Image and identities. Routledge.
- 松井豊, 1996. 親離れから異性との親密な関係まで, In 斎藤誠一 (編), 青年期の人間関係, 培風館.
- 大橋正夫, 1984b. 対人関係の諸相, In 大橋正夫 (編), 対人関係の社会心理学, 福村出版.
- Palmonari, A., Kircher, E., and Pombeni, M. L., 1991. Different effect of identification with family and peers on coping with developmental tasks in adolescence, *European Journal of Social Psychology*, Vol.21, 381-402.
- Peterson, A. C., 1988. Adolescent development, *Annual Review of Psychology*, Vol.39, 583-607.
- Rawlins, W. K., and Holl, M. R. 1988 Adolescents' interaction with parents and friends: Dialectics of temporal perspective and evaluation, *Journal of Social and Personal Relationships*, Vol.5, 27-46.
- Scott, S., 1997. How to say no and keep your friends. HRD Press.
- Scheidlinger, S., 1984. The adolescent peer group revisited: Turbulence or adaptations?. *Small Group Behavior*, Vol.15(3), 387-397.
- Shulman, S., 1993. Close relationships and coping behavior in adolescence, *Journal of Adolescence*. Vol.16, 267-283.
- Stefanco, M. 1984 Trends in adolescent research: A review of articles published in adolescence -1976-1981, *Adolescence*, Vol.19(73), 1-14.